日本と比較しながら見るドイツの日常生活レベルでの高齢者へのインフォーマルな支援

早稲田大学　創造理工学部　准教授（任期付）
芳賀　和恵

1 テーマと背景

一般に、個人は加齢とともに、様々な理由から、日常生活で他者の支援や援助が必要になることが増えていく傾向がみられる。日本では、伝統的に高齢者の支援・介護は家族内で行われてきた。しかし、核家族化や少子化が進み、「子供が親の面倒を見る」という従来のモデルは維持が難しくなった。同じような変化が多くの国で見られる。国際調査が行われたドイツ、アメリカ、スウェーデンでも同様な課題を抱えていると考えられる。このような社会の変化に対応しつつ、支援が必要な人のニーズに合う支援を持続的に行うことができる仕組みを持つことが必要である。困っている人への支援の提供という点において、自由経済の市場はこれらの人々が必要とする財やサービスを必ずしもすべて生産しない。例えば、市場で十分な需要が見込まれない財は供給されない。市場では、福祉の観点からの必要性は、財やサービスの供給で最優先される条件ではない。そのため、市場の経済活動を補完するような、市場を通さない形で支援を欲する人への財やサービスの提供がなされることが大切である。

本稿では、これまで主として家族内で担われてきた高齢者への支援は、核家族化や少子化などの社会の変化を受けて、家族に代わって誰によって提供され得るのかについて、国際比較調査から考える。日本では地域包括支援センターが高齢者に関する相談を受けて、個人のそれぞれのニーズに見合う支援を提案したりコーディネートしたりしている。このようなワンストップで対応する機関の存在は、他国に比べて優れていると捉えられることも少なくない。しかし、高齢者が日常生活で支援を必要とするようになる推移がかなりゆっくりと進展する場合、高齢者は要支援認定となる前の期間が長く続き、公的に支援を受けるほどではないちょっとした日常生活での手助けが欲しい状態での自立した日常生活が長く続く。そこで必要とされるのは、例えば、住居内の高い場所にものを収納したり、取り出したりする程度の日常生活での手助けである。本稿では、同居の家族やすぐに来てもらえる別居の家族の存在がない場合、高齢者があてにできるちょっとした手助けをしてくれるのは誰なのかについて考える。日常生活での支援に関して、地域に密着した人材、特に自発的な有志による支援は、大きな団体や組織による支援では汲み取ることが難しい支援を、高齢者の要望により沿った形で提供できる可能性を持っている。すぐに思い浮かぶのは、ボランティアによる支援である。日本では、自国のボランティア参加があまり振るわず、多くの他国のほうがボランティア活動が盛んであるとイメージされている。ドイツに対しても「ボランティア参加が（日本より）活発である」というイメージを持たれがちである。本稿では、ドイツは日本よりボランティア活動が活発なのか、本当にボランティア支援が家族がこれまで担ってきた高齢者の手助けの代替となっているのかについて、国際比較調査結果を参照しつつ検討する。また、ドイツではボランティアを含むインフォーマルな高齢者への支援への活動参加をうながす制度的な仕組みがどのように設けられているかについても述べる。

2 第 10 回国際比較調査結果からみるボランティアをとりまく日本とドイツの状況

国際比較調査のボランティアに関する質問の回答からドイツと日本を比較するにあたり、まず国際比

較調査の回答者がどのような人々であるかについて、いくつかの質問の回答から整理する。この国際調査の回答者の大半は、日常生活で介助や介護を必要としない。Q5「あなたは日常生活を送る上で、誰かの介助や介護が必要ですか」について、「介助・介護を必要としない」を選択した回答者は、日本で 90.7%、ドイツで 88.0%である（表 1）。また、4 か国全体(n = 4751)では 91.8%である。

表 1:　第 10 回国際比較調査の回答者の日常生活の状態（%）

	介助や介護が必要なくまったく不自由なく暮らせる	介助や介護が必用なく少し不自由だが何とか自分でできる	2項目の合計
ドイツ (n = 1030)	72.8	15.1	88.0
日本 (n = 1524)	73.0	17.7	90.7
アメリカ (n = 1104)	79.9	14.0	93.9
スウェーデン (n = 1093)	83.5	11.3	94.8

注 1:　第 10 回国際比較調査の Q5「あなたは日常生活を送るうえで、誰かの介助や介護が必要ですか」の回答からの抜粋である。
注 2:　Q5 の回答選択肢は、上記 3 項目のほかに「不自由で、一部ほかの人の介助や介護を受けている」、「不自由で、全面的にほかの人の介助や介護を受けている」、「不明・無回答」がある。
注 3:　本稿では主としてドイツと日本を比較するが、参考として他の調査国であるアメリカとスウェーデンの回答も表中に記載する。

また、Q4「あなたの現在の健康状態はいかがですか」では健康状態が「よい」「まあよい」「ふつう」を選んだ日本の回答者の合計は 78.5%であり、ドイツの回答者の合計は 77.0%である（表 2）。

表 2:　第 10 回国際比較調査の回答者の健康状態（%）

	よい	まあよい	ふつう	3項目の合計
ドイツ (n = 1030)	4.8	36.8	35.4	77.0
日本 (n = 1524)	17.8	14.2	46.5	78.5
アメリカ (n = 1104)	8.6	57.6	23.0	89.2
スウェーデン (n = 1093)	19.3	49.3	24.1	92.7

注 1:　第 10 回国際比較調査の Q4「あなたの現在の健康状態はいかがですか」の回答からの抜粋である。
注 2:　Q4 の回答選択肢は、上記 3 項目のほかに「あまりよくない」、「よくない」、「不明・無回答」がある。
注 3:　本稿では主としてドイツと日本を比較するが、参考として他の調査国であるアメリカとスウェーデンの回答も表中に記載する。

上記より、回答者の多くは健康状態が良好である。だが、高齢期においては、要支援、要介護に認定されていなくとも、加齢による身体能力の減少（いわゆる「フレイル」、「サルコペニア」、「ロコモ」[1]と表現される現象）によって、日常生活のちょっとした支援が欲しくなることが増えていく。このことを考慮すると、回答者の多くが日常生活でのちょっとした支援を欲する状態にあると解釈できる。

国際比較調査の回答者の日常生活でのボランティア活動との関わりを 2 つの点から見てみる。回答者のボランティア利用者としてのあり方と、回答者のボランティア提供者としてのあり方である。まず、国際比較調査結果から、ドイツでは日本よりも高齢者はボランティア支援を積極的に利用しているのかどうかを考察する。ボランティア支援の積極的な利用状況は、ボランティア支援の提供が十分に認知されており、支援の提供も豊かになされていることを間接的に示していると考えられる。回答者のボランティア支援利用について、Q27「あなたは、日常生活のちょっとした困りごと（電球の交換や庭の手入れなど）が、様々な理由で一人ではできなくなったとき、同居の家族以外に頼れる人がいますか」の回答を見る。設問から、高齢者[2]はまず第一に家族にちょっとした困りごとを頼むことが想定されており、Q27 は第一に頼れる存在（家族）以外に頼れる存在があるかどうかを問うていると考えられる。Q27 は、複数回答が可能である。回答を見ると、すべての国で「別居の家族・親族」が最も多く選択されている（日本: 61.2%、アメリカ:　39.7%、ドイツ:　72.6%、スウェーデン:　58.2%）。この結果から、同居であれ別居であれ家族が高齢者が最も頼りにしている存在であると考えられる。Q27 では、各国とも「地域活動団体・ボランティア活動団体」を選択した人数は少なく、ドイツと日本も回答が少ない（ドイツ:　2.2%、日本:　3.8%。また参考として、アメリカ:　3.1%、スウェーデン:　1.6%）。高齢者は日常生活でのちょっとした支援が欲しい時に、ボランティアに頼むことが一般にイメージされているよりも少ない状況である可能性がうかがえる。

ここでボランティア支援を別な視点から見てみる。すなわち、ボランティア支援の提供について、今回の国際調査結果からうかがえるかどうか考える。国際調査には、高齢者向けのボランティア支援の提供状況を全世代に直接問う設問はない。また、高齢者支援目的のボランティアに限定して回答者（高齢者）にボランティア参加について問う設問もないが、Q31「福祉や環境を改善することなどを目的としたボランティア活動その他の社会活動を行っていますか」という問いがある。この質問の回答から、高齢者のボランティア参加への積極性が間接的にうかがえるであろう。ドイツは Q31 で「社会活動に参加していない」の回答者の割合が 4 か国のなかで最も多く、かつ、他の 3 か国との差が際立っている（表 3）。Q31 のドイツの回答で興味深いのは、「ボランティア活動や社会的活動に全く参加したことがない」回答が、他の 3 か国に比べて目立って多いことである。高齢期前の体力面その他の条件が整っている時期におい

[1] 「フレイル」、「サルコペニア」、「ロコモ」が表す身体状態およびそれぞれの相互関係などの概念の整理のためには、例えば伊藤（2022）を参考にされたい。
[2] ちょっとしたことをまず家族に頼る傾向は、高齢者に限らずすべての年代の個人について該当するであろうと考えられるが、本稿は高齢者についての考察であるため、ここでは「高齢者」としている。

ても、ボランティア活動や社会活動を行わなかった人が多いと考えられる。

表 3:　第 10 回国際比較調査の回答者のボランティア活動への参加状況（%）

	全く参加したことがない	以前には参加していたが、今は参加していない	2項目の合計
ドイツ (n = 1030)	**47.7**	24.0	**71.7**
日本 (n = 1524)	38.8	16.3	55.2
アメリカ (n = 1104)	29.3	26.6	56.0
スウェーデン (n = 1093)	29.2	19.3	48.5

注 1:　第 10 回国際比較調査の Q31「あなたは福祉や環境を改善することなどを目的としたボランティア活動その他の社会活動を行っていますか」の回答からの抜粋である。
注 2:　Q31 では回答者は複数の選択肢を選ぶことができる。

Q31 においてボランティア活動や社会活動を行わないと答えた回答者に、社会活動に参加しない理由を問う Q32「あなたがこのような社会活動に現在参加していない理由をお答えください」の回答では、各国で健康・体力の問題が多くあげられており（日本:　33.1%、アメリカ:　17.6%、ドイツ:　25.2%、スウェーデン:　18.5%）、健康・体力面での懸念が国を越えて高齢者に共通する理由と考えられる。ドイツに関して Q32 に対する回答で特徴的なのは、ドイツでは「関心がない」が最も多く選ばれており、他の 3 か国に対して顕著に多いことである（日本:　20.2%、アメリカ:　31.4%、ドイツ:　41.9%、スウェーデン:　27.0%）。Q31 は「福祉や環境を改善することなどを目的とした活動」を問うており、すべての種類のボランティア活動や社会活動を網羅した問いではないものの、Q31 と Q32 の回答からは、ドイツの回答者にボランティア・社会活動参加への積極性を見ることができない。むしろ日本のほうが積極性があるように見える。さらに、Q40「あなたが大切だと思う、高齢者に対する政策や支援はどれですか」において「ボランティア活動のための機会の提供」という選択肢はドイツの回答者にあまり多く選択されていない。このことから、Q31 の回答にみられるドイツにおける社会活動の参加が少ない理由は、ドイツでボランティア活動の機会が少ないことではないと考えられる。ボランティアの場があっても関心がないなどの理由で参加しない人の存在がうかがえる。

3 近所での助け合い

上記でみたようにドイツはボランティアが活発な国であるとはいいがたい。しかし、ボランティア支援ではないが類似する支援の形として、近所の助け合いがある。先にも見た「日常のちょっとした困りごとを相談する同居の家族以外の人」を問う Q27 は、複数回答が可能である。すべての国で「別居の家族・親族」が最も多く選択されている（日本:　61.2%、アメリカ:　39.7%、ドイツ:　72.6%、スウェーデン:

58.2%）が、ドイツでは「別居の家族・親族」のほかに「友人」（ドイツ:　62.4%。それに対して、日本: 14.3%、アメリカ:　29.3%、スウェーデン:　27.5%）、「近所の人」（ドイツ:　49.8%。それに対して、日本:　12.1%、アメリカ:　22.8%、スウェーデン:　25.3%）も多く選択されている。Q27 は複数回答が可能であることから、ドイツの回答者は、日常生活で頼る人が「家族・親族」に集中している日本よりも多岐にわたっていると考えることが可能である。また、この回答から、ドイツでは日常支援の提供者として、「近所の人」や「友人」がボランティア団体に代わる存在である可能性が考えられる。実際にもドイツでは近所の人との相互の助け合いが広く多くみられる。つまり、ボランティア団体のみならずこのようなインフォーマルな互助も含めて高齢者への日常生活での支援が存在すると見ることができる。

Q27 の選択肢間の相関係数（表 4〜7）を見てみると、興味深いのは、回答数では様々な選択肢が選ばれているドイツであるが、それぞれの選択肢は相互に関連して選ばれているとは言い難い点である。ドイツの回答間で相関がみられると考えられるのは、選択肢「友人」と「近所の人」のみである。そして、表 4 の相関係数（0.268）からは、その相関はそれほど強いとは言えない。「友人」と「近所の人」の関連は、日本、アメリカ、スウェーデンでも見られる。日本では「友人」と「近所の人」の相関係数は 0.279（表 5）であり、ドイツと同程度である。アメリカでは、この選択肢感の相関係数は 0.460（表 6）、スウェーデンでは、この選択肢間の相関係数は 0.432（表 7）であり、ドイツよりも強い相関を示している点が興味深い。ドイツで他の 3 国よりも「別居の家族・親族」以外の選択肢（「友人」、「近所の人」）が多く選ばれているのは、むしろ「頼れる人がいない」と答えた回答者が少ないことと関わりがあるのかもしれない。「頼れる人がいない」のは、日本では 16.5%、アメリカでは 30.2%、ドイツでは 5.2%、スウェーデンでは 22.4%であり、ドイツの回答は少ない。「家族・親族」に頼れない人が、頼れる人を家族・親族以外に持っている人が、他の 3 か国より多いドイツは、「なんらかの頼れる存在」を持っている人が多いことが特徴的だと解釈できる可能性がある。

表 4:　Q27 の「日常生活のちょっとしたことで頼れる人」の選択肢の相関係数:　ドイツ(n = 1030)

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1)近所の人	0.498	0.500	1.000					
(2)別居の家族・親族	0.726	0.446	0.006	1.000				
(3)友人	0.624	0.485	0.268	0.014	1.000			
(4)地域活動団体・ボランティア活動団体	0.022	0.148	0.086	0.004	0.077	1.000		
(5)民間サービス事業者	0.120	0.326	-0.022	-0.040	-0.064	0.005	1.000	
(6)その他	0.020	0.141	-0.020	-0.096	0.027	-0.022	-0.011	1.000

表 5:　Q27 の「日常生活のちょっとしたことで頼れる人」の選択肢の相関係数:　日本(n = 1524)

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1)近所の人	0.121	0.327	1.000					
(2)別居の家族・親族	0.612	0.488	-0.025	1.000				
(3)友人	0.143	0.350	0.279	-0.020	1.000			
(4)地域活動団体・ボランティア活動団体	0.038	0.191	0.126	-0.031	0.095	1.000		
(5)民間サービス事業者	0.135	0.342	-0.035	-0.142	-0.024	0.082	1.000	
(6)その他	0.050	0.218	-0.048	-0.226	-0.051	0.002	-0.020	1.000

表 6:　Q27 の「日常生活のちょっとしたことで頼れる人」の選択肢の相関係数:　アメリカ(n = 1104)（参考）

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1)近所の人	0.228	0.420	1.000					
(2)別居の家族・親族	0.397	0.489	0.132	1.000				
(3)友人	0.293	0.456	0.460	0.140	1.000			
(4)地域活動団体・ボランティア活動団体	0.031	0.173	0.190	0.080	0.184	1.000		
(5)民間サービス事業者	0.146	0.353	0.050	-0.057	-0.007	0.060	1.000	
(6)その他	0.050	0.218	-0.055	-0.109	-0.074	0.056	0.000	1.000

表 7:　Q27 の「日常生活のちょっとしたことで頼れる人」の選択肢の相関係数:　スウェーデン(n = 1093)（参考）

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
(1)近所の人	0.253	0.435	1.000					
(2)別居の家族・親族	0.582	0.493	0.093	1.000				
(3)友人	0.275	0.447	0.432	0.116	1.000			
(4)地域活動団体・ボランティア活動団体	0.016	0.124	0.080	0.002	0.055	1.000		
(5)民間サービス事業者	0.150	0.357	0.079	-0.002	-0.007	-0.011	1.000	
(6)その他	0.035	0.183	-0.053	-0.113	-0.072	-0.024	-0.052	1.000

ドイツで「近所の人」が高齢者[3]にとって頼れる存在であることについて、近所の人との付き合いを問う Q28「あなたは、ふだん、近所の人と、どのようなお付き合いをしていますか」から示唆が得られる。Q28 も複数回答が可能な設問である。他の 3 か国と比べてドイツで多く選択されたのは、「お茶や食事を一緒にする」（49.0%）、「「相談ごとがあった時、相談したり、相談されたりする」（46.8%）、「病気の時に助け合う」（35.5%）である。普段からお茶や食事を一緒にしたりすることが、それだけにとどまらず、近所の人に困ったときに相談できる関係を作る下地となっていると考えることが可能であろう。

直感的に、近所の人と助け合う関係を持っている人は、普段から近所づきあいをケアしているイメージがわく。ドイツでは、他の 3 国と比べて、近所づきあいを普段からまめにしていて、頼り合える関係性を他の国よりも強く築いているといえるのかという問いを考えるために、選択肢間の相関係数を見てみる（表 8～11）。

[3] 近所の人が頼れる存在であることは、高齢者に限らずすべての年代の個人について該当するであろうと考えられるが、本稿は高齢者についての考察であるため、ここでは「高齢者」としている。

表 8:　Q28「近所の人との普段の付き合いかた」の選択肢の相関係数:　ドイツ(n = 1030)

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
(1)お茶や食事	0.490	0.500	1.000							
(2)趣味	0.155	0.362	0.282	1.000						
(3)相談	0.468	0.499	0.330	0.226	1.000					
(4)家事	0.090	0.287	0.152	0.127	0.173	1.000				
(5)病気の時の助け	0.355	0.479	0.355	0.163	0.385	0.212	1.000			
(6)あげたりもらったり	0.151	0.359	0.306	0.223	0.277	0.264	0.292	1.000		
(7)立ち話	0.413	0.493	-0.459	-0.240	-0.359	-0.188	-0.354	-0.233	1.000	
(8)その他	0.025	0.157	-0.009	0.000	0.010	-0.008	-0.042	0.018	-0.047	1.000

注:　表中で取り上げた Q28 の選択肢の全文は次の通りである。(1) お茶や食事を一緒にする、(2) 趣味をともにする、(3) 相談ごとがあった時、相談したり、相談されたりする、(4) 家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする、(5) 病気の時に助け合う、(6) 物をあげたりもらったりする、(7) 外でちょっと立ち話をする程度、(8) その他

表 9:　Q28「近所の人との普段の付き合いかた」の選択肢の相関係数:　日本(n = 1524)

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
(1)お茶や食事	0.114	0.317	1.000							
(2)趣味	0.096	0.294	0.312	1.000						
(3)相談	0.146	0.353	0.362	0.220	1.000					
(4)家事	0.034	0.182	0.183	0.184	0.271	1.000				
(5)病気の時の助け	0.035	0.183	0.237	0.157	0.287	0.241	1.000			
(6)あげたりもらったり	0.383	0.486	0.250	0.170	0.348	0.164	0.145	1.000		
(7)立ち話	0.548	0.498	-0.215	-0.197	-0.159	-0.105	-0.058	0.062	1.000	
(8)その他	0.056	0.231	-0.079	-0.060	-0.085	-0.046	-0.046	-0.140	-0.189	1.000

注:　表中で取り上げた Q28 の選択肢の全文は次の通りである。(1) お茶や食事を一緒にする、(2) 趣味をともにする、(3) 相談ごとがあった時、相談したり、相談されたりする、(4) 家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする、(5) 病気の時に助け合う、(6) 物をあげたりもらったりする、(7) 外でちょっと立ち話をする程度、(8) その他

表 10:　Q28「近所の人との普段の付き合いかた」の選択肢の相関係数:　アメリカ(n = 1104)（参考）

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
(1)お茶や食事	0.238	0.426	1.000							
(2)趣味	0.117	0.321	0.392	1.000						
(3)相談	0.245	0.431	0.378	0.284	1.000					
(4)家事	0.101	0.302	0.319	0.223	0.261	1.000				
(5)病気の時の助け	0.214	0.410	0.388	0.257	0.421	0.322	1.000			
(6)あげたりもらったり	0.124	0.330	0.280	0.239	0.341	0.247	0.353	1.000		
(7)立ち話	0.573	0.495	-0.463	-0.325	-0.351	-0.250	-0.368	-0.281	1.000	
(8)その他	0.035	0.185	-0.026	-0.009	0.050	-0.032	-0.004	0.032	-0.123	1.000

注:　表中で取り上げた Q28 の選択肢の全文は次の通りである。(1) お茶や食事を一緒にする、(2) 趣味

をともにする、（3）相談ごとがあった時、相談したり、相談されたりする、（4）家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする、（5）病気の時に助け合う、（6）物をあげたりもらったりする、（7）外でちょっと立ち話をする程度、（8）その他

表 11:　Q28「近所の人との普段の付き合いかた」の選択肢の相関係数:　スウェーデン(n = 1093)（参考）

	平均	標準偏差	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)
(1)お茶や食事	0.288	0.453	1.000							
(2)趣味	0.071	0.258	0.294	1.000						
(3)相談	0.272	0.445	0.279	0.190	1.000					
(4)家事	0.011	0.104	0.127	0.039	0.074	1.000				
(5)病気の時の助け	0.106	0.308	0.253	0.089	0.204	0.192	1.000			
(6)あげたりもらったり	0.160	0.367	0.234	0.102	0.272	0.098	0.287	1.000		
(7)立ち話	0.831	0.375	-0.041	0.011	0.155	-0.070	0.021	0.077	1.000	
(8)その他	0.024	0.152	-0.007	-0.043	-0.014	-0.016	0.005	-0.035	-0.122	1.000

注:　表中で取り上げた Q28 の選択肢の全文は次の通りである。（1）お茶や食事を一緒にする、（2）趣味をともにする、（3）相談ごとがあった時、相談したり、相談されたりする、（4）家事やちょっとした用事をしたり、してもらったりする、（5）病気の時に助け合う、（6）物をあげたりもらったりする、（7）外でちょっと立ち話をする程度、（8）その他

日本との比較で興味深いのは、Q28 の回答数は日本とドイツで異なるものの、それぞれの選択肢間の相関係数は、日本とドイツで類似の傾向がみられることである。近所の人と「相談事を相談したりされたりする」は、日本では「お茶や食事を一緒にする」、「物をあげたりもらったりする」、「家事やちょっとした用事をしたりしてもらったりする」、「病気の時に助け合う」と高めの正の相関がある。他方で、ドイツも「相談事を相談したりされたりする」は、「お茶や食事を一緒にする」、「病気の時に助け合う」、「物をあげたりもらったりする」と正の相関を示している。

日本もドイツも選択肢「ちょっとした立ち話をする」は、日本では相関があるとは言えない程度ではあるものの、他の選択肢とマイナスの相関係数となっている。この点について、アメリカでも大まかに同じ傾向がみられ、スウェーデンでは相関がほぼ見られない。国ごとにばらつきはあるものの、ドイツも日本も近所の人と「ちょっと立ち話をする」程度の近所づきあいをしている人は、近所の人と軽めの浅い関係性を持つにとどまっていると解釈できる。相談をお互いにしたり、家事や病気の時に助け合ったりするのは、それよりもより深い関係性を築けている場合だということであろう。お茶や食事を一緒にすることは、ある程度の付き合いの深さを示す指標と考え得る。

ドイツと日本をもう少し詳しく比較すると、興味深いことに、ドイツでは「家事やちょっとした用事をしたりしてもらったりする」、「病気のときに助け合う」の選択肢が「物をあげたりもらったりする」と日本よりも強い相関を見せている。その理由は国際調査回答結果からは判別しがたく推測するしかないが、ドイツでは他者に何か親切なことをしてもらったときに相手に小さな贈り物をしたり、誕生日を成人になってからも祝い合うというような、相手に負担を感じさせない程度の小さな贈り物をする習慣がある。日本とは異なるが贈り物の文化があることが、ドイツの相関係数の背景として考えられる。

4 ドイツの近所での助け合いの社会的要素

前章で見たように、Q27 の回答からは、ドイツでは家族以外にも近所の人や友人に頼る人が日本、そしてアメリカやスウェーデンよりも多い。このことを説明しうる社会的背景として、ドイツでは社会の課題解決は可能な限り課題に直面する個人もしくは当事者に近い社会的な層でなされるべきであるという「補完性の原理」（Subsidiaritätsprinzip）が社会で受け入れられている[4]点があげられる。「補完性の原理」では、社会で制度的により上位に存在する組織や機関は、下位の組織や個人が機能を行使する能力に欠ける場合にのみ、下位の組織や個人を「補助」したり「補完」する立場に立つ。例えば、社会制度的に上位システムである国は、個人が課題解決できるような社会的枠組みを整備することが役割となる。また、個人レベルでの相互の自助活動として、近所の人や知り合いとのインフォーマルな相互の協力の形が広くみられる。ドイツでは、近所の人によるインフォーマルな助け合いは、「近所のヘルプ」（Nachbarschaftshilfe）（Bundesministerium für Bildung, Familie, Senioren Frauen und Jugend, n.d,）と呼ばれる。

当事者レベルの助け合いが浸透している感のあるドイツではあるものの、近所づきあいが希薄になってきているのも事実である。それにもかかわらず「近所のヘルプ」が持続的に行われている一つの要因として、「近所のヘルプ」が社会的に制度化されている点があげられよう。「近所のヘルプ」を利用する場合の費用は、介護保険で月に 131 ユーロがカバーされる（AOK, n.d.）。その場合、「近所のヘルプ」に該当する条件が明確に定められている（Nachbarschaftshilfe NRW, n.d.）。また、「近所のヘルプ」の提供者が報酬を受け取ることも可能である。多くの場合、5～10 ユーロ/時間が妥当だと考えられている（AOK, n.d.）。ドイツでは「近所のヘルプ」による支援に対する報酬を受けることは、忌避されていない。

5 まとめ

国際比較調査からは、ドイツや日本のみならず、調査国のすべてにおいて、高齢者が日常生活のちょっとした助けを求める際にボランティアによる支援は選ばれていない。4 か国すべてにおいて、高齢者が頼る一番の存在は家族であることが見て取れる。ドイツでは近所の人との助け合いが他の 3 国よりも多いことが目立つ。近所の人の方がボランティアよりも頼れる存在だといえる。日本では近所の人との助け合いはドイツよりも少ないが、日常のちょっとした助けを近所の人に求める回答者は、ドイツでも日本でも同じような近所の人との関係性を築いていることが興味深い。

すなわち、日本でも近所の人と表層のみではなくもう少し深い関係性を築く人が増えれば、ドイツで見られる「近所のヘルプ」のような近所での相互の助け合いが増える可能性が考えられる。しかし、近所づきあいのありかたは、社会的な要素によるところが多く、近所づきあいの活性化は容易ではないとも考えられる。日本でのもう一つのむずかしさは、「近所のヘルプ」などのインフォーマルで非営利な性格の支援に対する報酬の扱いだと考えられる。日本では、高齢者向けの支援に限らず、一概に個人のボランティアへの持続的参加が難しい点がある。持続的なボランティア参加を難しくしている要因の一つとして、ボランティア活動が無償だと受け止められていることがあげられる。ボランティアに対する報酬の是非、また、報酬額についての議論（例えば小野, 2007）は従来より存在し、今でも議論が分かれている。ボランティアに対する報酬が当然だとされているとは言えない日本に比べて、ドイツでは報酬について日本よりも現実的（プラグマティック）に運用しているといえよう。

---

[4] 「補完性の原理」はドイツの社会的市場経済の基本原則の一つである。

謝辞
本稿の分析の一部は早稲田大学データ科学センターのデータ科学研究相談を受けて実施されました。

参考文献

伊藤稔 (2022) 「フレイルの最新動向について」,『政策研ニュース』No.66　2022 年 7 月，93－101, https://www.jpma.or.jp/opir/news/066/09.html（最終閲覧 2026 年 2 月 26 日）

小野明子（2007）「『有償ボランティア』は労働者か?--活動実態と意識の分析から」,『日本労働研究雑誌』49, 77－88.

AOK (n.d.) Nachbarschaftshilfe, https://www.aok.de/pk/alltagshilfe-pflegende-angehoerige/nachbarschaftshilfe/.（最終閲覧 2026 年 3 月 3 日）

Bundesministerium für Bildung, Familie, Senioren Frauen und Jugend (n.d,) Hallo Nachbar – Wie kann ich helfen?, https://www.serviceportal-zuhause-im-alter.de/nachbarschaftshilfe-und-soziale-dienstleistungen/basiswissen-nachbarschaftshilfe/.（最終閲覧 2026 年 3 月 3 日）

Nachbarschaftshilfe NRW: Leitseite, https://nachbarschaftshilfe.nrw/.（最終閲覧 2026 年 3 月 3 日）